



植物園での花見



南京明城牆



CS 対戦



杭州西湖三潭映月



南湖レジャーの旅



梅採取



台湾企業の廟会



東山寺ピクニック

合璧の魂一輝

わたしは会社に入ったばかりのころ、その芸術的な雰囲気と整った環境に惹かれました。それはまるで花園か学校のようにきれいだっただけです。同僚に聞いてみると、「董事長の提案で毎朝7時に出勤して5S運動をしているから」という返事でした。こんなに大きな会社なのに、清掃員は一人もいないで、従業員自らがきれいな環境を維持していることにわたしは感動しました。そして、この会社が行っているのはわたしがはじめて耳にした「禪の5S」とのこと。普通の会社の5S運動とどう違うのか興味が高まりました。



「禪の5S」とは一体何か。わたしはずっとその答えを探してきましたが、きょうその真理がわかったような気がします。今朝、董事長はいつものようにわたしから従業員に会社の文化や精神理念について話してくれました。その中に董事長自ら十数年にわたってトイレを掃除している話と机を拭いた雑巾で顔を拭きました。正直に言って、わたしは信じられませんでした。しかし、きょう驚かされました。72歳になる高齢者、ひとつの企業組織の董事長が従業員のために、本当にトイレを掃除したのです。素手で便器を拭き、小便便器の中に嵌ったふたを取り出して洗いました。わたしは自分の目を疑いました。そして恥ずかしさで顔を赤らめ、うつむくしかありませんでした。さらに驚いたのは、董事長はトイレがきれいになったことを証明するため、便器を拭いた雑巾で自分の顔を拭いたのです。これは本当の話です。わたしも同僚もこの様子を見ていたのですから。わたしは「禪の5S」が何となくわかったような気がしました。董事長の「禪」には修身だけでなく謙虚さや偉大さも含まれているのです。

皆さんは何故わたしにこんなことを書くのかと思うかもしれませんが、それは皆さんに「わたしは感動し、恥ずかしくなり、そして悟った」ということを伝えたかったからです。古くから「大事を成すものは小事からはじめる」といわれますが、董事長は何千年にもわたって言い伝えられてきたこの言葉の真理を自らの行動でもってわたしたちに教えたのだと思います。

翌日、わたしはさっそくトイレ掃除をする同僚に董事長から学んだ成果を伝えました。彼らとともに素手で掃除し、便器を拭いた雑巾で汗を拭きました。このとき、彼らもそれを不思議に思わなかったようです。このとき彼らが感じたのは恥ずかしさと感動だと思えます。そして、わたしは簡単なひとつの言葉から合璧文化の深さと大きさを実感したのです。

董事長の今回の行動はわたしだけでなく、多くの同僚に大きな影響を与えました。董事長はいつも行動でもって合璧の文化を伝え、わたしたちに知恵というものを実感させてくれます。

「知恵、悟り、行動」。これはわたしたちの会社の行動方針です。わたしたちは知恵を経験し、悟りを持ってすぐに行動すること、で、董事長の呼びかけに応え、合璧文化を伝承していかなければなりません。そうすることで、董事長の下、合璧は東方世界に響え立ち、常に発展を続けていけるのです。 上海合璧製課同僚 劉樹偉

小さな感動物語

品質検査の仕事をはじめたばかりのころ、わたしは何をどうしたらいいのかわからなかった。しかし、王田鳳さんと周星星さん、ふたりの同僚がいろいろ教えてくれました。彼らは自分の仕事が忙しいにもかかわらず、その手を止めて、ときには休憩時間中にもわたしに教えてくれました。また、毎日完成品を運ぶのに、台車を押したりダンボールを取りに行ったり、わたしを手伝ってくれました。わたしは彼らふたりにとっても感謝しています。そして将来はわたしも彼らのように、新人に教えることのできるような検査員になりたいと思っています。 上海合璧製課同僚 顧曉燕



3月8日のことだったと思います。その日、わたしは足をくじいてしまいました。次の日は日曜日で、わたしは朝からひとり家にいたのですが、思ったよりひどくて下の階に降りられないほどでした。そこで、わたしは友達に電話しました。何度かかけても電話が通じません。そのときわたしの頭に浮かんだのが董組長です。わたしは董組長に電話して大まかな話をすると、彼は「じゃ、病院に連れてってあげるから待ってろよ」といってくれました。

董組長は歩けないわたしを背負って車に乗せてくれました。まるで彼の弟になった気分でした。病院に着くと、彼はわたしに「座ってればいいから。動かなくてもいいから」といって、手続きから何から全部やってくれました。このときは本当に彼のことをお兄さんと呼びたい気持ちでした。医者の診断は大したことないということでした。それを聞いて、董組長も「よかったな。二、三日休んでればよくなるさ」といいました。そのあと、彼はわたしを家まで送ると、水を汲んで薬を飲ませてくれました。わたしの目は涙があふれてきました。このときすでに昼過ぎになっていました。ご飯を食べるのさえ忘れていました。董組長が帰ったあと、わたしは彼に対する感謝の気持ちでいっぱいになりました。彼は週に一度の大切な休みをわたしのために使ってくれたのです。 数日後、わたしの足はよくなりました。董組長にお礼をいうと、彼は「友達なんだから当然だよ。これからも何かあったら遠慮せずにいってくれよ」といってくれました。 上海合璧製課同僚 周協勇



不斷地思考與行動
誠信規變創新卓越
創造價值共生共榮
感謝報恩回饋社會

2011/011
第11期 11月10日發行

出版社：合璧文化基金會 發行人：詹其力 編輯指導：陳慶煙、詹杰文
總編：王迎春、林生富 編輯委員：李高燕、徐 權 印刷：上海綜禾印刷有限公司

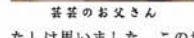
人生は常に学習 — 感謝と恩返し

わたしは詹其力董事長の姪で、国語の先生をしています。わたしの父方は男の兄弟が8人、女の兄弟が6人ですが、この中で父は男の兄弟の4番目、詹其力董事長は6番目です。家に子供が多いと大変だということと親戚に子供がいなかったことで、其力おじさんは14歳のとき親戚の家に入りました。それでも、其力おじさんは実家の両親と親しくしていたので、わたしは其力おじさんの成長、就学、会社の創業といった過程を見てきました。ここ数期の合璧流の中で従業員の董事長に対する感謝と感動の話を読みました。これらの話は実利を重視する現代社会において一服の清涼剤のように感じました。そこでわたしなりに感じたこと（其力おじさんからこれまでを受けた援助や教えに対する感謝の気持ち）を書き綴ってみました。

もし過去における失敗や苦勞がなければ、こんなに多くのことを学んだり感動を味わったりすることはなかったでしょう。その失敗や苦勞は、ときには家族をどん底に陥れることもあるかもしれませんが、それでも時間が経てばそこからは多くのことを学び、感動を味わうことができるのです。感謝や恩返しの気持ちはそうした中で生まれてくるものだと思います。

「眼着他起朱樓，眼看他樓塌了（彼は瞬間に朱樓を建て、瞬間に宴会を開いた）。そして彼の朱樓は瞬間に崩れた」とこれは高校の国語で習った桃花扇（孔尚任著）の一節です。当時先生は授業中に態度となくこの一節を紹介してくれました。このとき十七、八歳だったわたしはその意味がよくわかりませんでした。それから十数年後、父が58歳の若さで亡くなりました。これを機に生活は一変しました。それまで親しかった人は離れていき、さらに数年後に家業が失敗したことで両親がともに築いた我が家を手放さねばならなくなりました。わたしは「桃花扇」のように瞬間にすべてが崩れていくのを味わったのです。繁栄は雲のように消えてなくなりました。このときの幸は今でも心の奥に残っています。

わたしたちの家は他人の手に渡りました。毎年お墓参りで故郷に帰るとき、わたしはかつての我が家の前を通ることができませんでした。しかし、「家」というもの（一族の絆）はこんなときでも感動と学習を与えてくれました。父は生前、一族を取りまとめる中心的役割を担っていましたが、父が逝去したあとにはこの役割を其力おじさんが引き継ぎました。当時其力おじさんは事業が軌道に乗り、経済的にも一旗を支えるには問題ありませんでした。そして積極的に恩返しをしようとしたのです。この二十一年間、其力おじさんは毎月わたしの母を経済面で援助してくれました。これによって子供のわたしも負担が軽減されました。これに対して其力おじさんは、自分が若いとき経済力がなく、祖父母に対して十分な孝行ができなかったとき、わたしの母が仕事をやめて（母はそれまで台中で働いていた）、田舎の花蓮（地名）に来て薬局の仕事をしながら祖父母の面倒を見てくれたことに対する恩返しだといっていました。わたしは思います。この世には裕福な人がたくさんいます。そしてこうした人たちが人助けをする機会も少なくありません。これはみんな「得之於人者太多，出之於己者太少（人から恩恵を受ける機会も多くても、人にそれらを施す機会が少ない）」ということを知っているからです。だから、ある人は進んで援助を行い、援助の必要な人はそれを受けることができるわけです。そんな中で、どうしたら与えられた人へ何かを得てもらうことができるのか。わたしはそれについて考えました。その答えが感謝には恩返しが必要だということでした。多くの人は感謝しますが、それに対して実際に何か行動することは稀です。なぜなら、みんな自分が中心だからです。わたしは以前から其力おじさんと何度か会っていましたが、彼のことを理解していたかといえば、それは疑問でした。しかし、其力おじさんが「企業禪師」と呼ばれ、「禪の5S」を重視するのを知ってから、彼のことが少しわかったような気がしました。禪は人の心の奥深くに「円満な知恵」を育みます。それはすべての知恵の源になりますが、無為の鍛錬を経てのみ形になります。生活の学問は究めれば哲学となります。しかし、哲学という何だか奥深くで、わたしのような凡人には理解できないもののように思えてしまうかもしれません。だから、哲学は宗教と同じで生活に根付いてこそ価値が生まれるのです。わたしは其力おじさんの持つ宗教家のような心が素晴らしいと思います。また、其力おじさんは中国数千年の孔孟思想、特に仁義の影響を受けています。仁とは誠実な愛の心、義とは行動に移す力。これはまさに感謝には恩返しが必要だということにほかなりません。このほか、古代インド文明、お釈迦様のいう「天人合一」の思想から芸術的な企業を築いて従業員に自然の中で仕事ができる環境を与えたり、ギリシアの哲學家アリストテレスの道徳と究極の道徳の境界（真善美）の考えをくわえて共生共榮の下で全ての人が互いに尊重しあう環境を作り出したりしています。



蒼蒼のお父さん

わたしは其力おじさんが子供時代、貧しくても勉強することを止めなかったこと、そして大人になって数枚の服とわずかなお金だけを持って台北へ行き、一生懸命努力して今日の合璧を作ったことを知っています。はじめ安東街の小さなアパートに住んでいたと思います。そのあとで世界大奮闘に力を入れたこと。そのころ買った車は三十年以上経った今でも運転しているそうです。それにしても其力おじさんの能力と財力があれば、もっと豪華な暮らしもできるはずですが、しかし、彼は昔ながらの質素な生活をして、人助けに力を注ぎました。その対象は一族に限らず、様々な人にとびまわります。これは儲家やお釈迦様の説いた「大愛」の考え方ではないでしょうか。其力おじさんは生命の真諦（不変の心理）は多くの人のために善行を行う、それによって注がなければならないことを知っているのだと思います。

約三十年にわたってわたしの家族を其力おじさんの援助によっていくつもの困難を乗り越えてきました。しかし、それよりも感謝しているのは学ぶことの大切さを感じられたことです。それは自分の生命の中に信仰をもつことともいえます。信仰の力は偉大で、人の考えや性格を最高極限まで引き上げてくれます。

俗にいう「名」と「利」について、其力おじさんはかなり前からそれらを得ていたといえます。しかし、彼のほしかった「利」は慈悲深く思いやりの心で善行を行うことによって得られるものです。そして「名」はほかの人たちが成長して幸せになることに影響を与えられる「名」です。生命は人にとってあっという間の短いものです。しかし、その中には素晴らしい要素にあふれています。こうしたことが其力おじさんの認識する真諦なのではないかと思えます。 台湾台北 經 李芸芸

利益の創造は企業の經營過程、「價值創造、共生共榮、感謝と恩返し、社會への還元」、これこそわたしたちの最終目標。